

| | | | | |
|---|-------------------------------|-------------------|-------|------------------------------|
| 報道資料 [2017.09.12] www.overseaschf.or.kr | 報道時期 | 配布の後、即時 | | |
| | 担当部署 | 協力支援チーム | 電話番号 | 02-6902-0731 02-6902-0775 |
| | 担当者 | カン・イムサン キム・ソンホ | F A X | 02-6902-0799 |
|  국외소재문화재재단 <small>Overseas Korean Cultural Heritage Foundation</small> | (04512) ソウル市中区世宗大路17ワイズタワー19階 | | | |

粉青沙器象嵌 李先齊 墓誌、「美しい寄贈」を通じてついに帰郷

・日本人の所蔵者、寄贈を契機に『韓日両国の信義を深め、厚誼を発展させる』と無償贈与を決定

国外所在文化財財団(理事長 池健吉(チ・コンギル)、以下‘財団’)は、1998年6月に韓国国内の文化財密売団が日本に不法搬出した朝鮮前期の墓誌(墓誌：死者の事績などを書いて墓にうめた石や陶板)の『粉青沙器象嵌 李先齊 墓誌』(以下、墓誌)1点を日本人の所蔵者(等々力孝志/1938～2016)から寄贈を受け、2017年8月24日に韓国国内に搬入し、最終的に韓国国立中央博物館に寄贈した。

墓誌の主人公は、華門(ピルムン)李先齊(イ・ソンゼ、1390～1453、本官は光州)、世宗(セジョン)年間に士官で『高麗史』を改竄して、集賢殿(チピョンジョン)副教理で『太宗実録』を編纂した。そして、江原道(カンウォンド)観察使、戸曹参判などの高位官職をあまねく経て、文宗(ムンジョン)年間に藝文館提学になった、朝鮮前期の湖南地域を代表する歴史的な人物である。

墓誌は、等々力邦枝(76歳)氏が『日韓両国の信義を深め厚誼を発展させること』を願って、亡き夫等々力孝志氏の遺志を最大限に酌み取りその善意により財団に寄贈したものである。

等々力邦枝氏は『墓誌は韓国美術を最も愛玩した亡き夫が大切にしておりました作品です。勿論、ご先祖様に仕える韓国人と同様に、日本人もご先祖様を敬う気持ちは同じであります。また、墓誌は、美術品としての芸術的価値以上に非常に大切な遺物であるとも、生前夫は申しておりました。故に、夫の遺志を最大限に尊重したいと考えました。』と理由を述べられた。

墓誌は来る9月19日に韓国国立中央博物館で、563年(製作1454年)ぶりにマスコミに初公開される予定であり、寄贈者の等々力氏や代理人など日本からも参加する。その後、墓誌は9月20日から10月31日まで国立中央博物館 朝鮮室で展示する予定である。

韓国国外への搬出及び韓国国内への帰還過程

1998年5月、韓国の文化財密売団は墓誌を金海(キムヘ)空港から搬出しようとした。しかし、墓誌の価値を一目で分かった金海空港の文化財鑑定官室がこれを防いだ。当時、墓誌については「犯罪要件」も成立できず、差し押さえ措置はもちろん、捜査機関に申告さえ出来なかった。

しかし、文化財鑑定官室は墓誌について詳細に描いて記録として残し、これを文化財管理局(現在、文化在庁)に情報として提供した。それにも関わらず、その1ヶ月の後に、韓国の文化財密売団がスーツケースに墓誌を隠して、金浦(キンポ)空港を通じて、鑑定の手続きも受けずに、不法に搬出し、その行方が分からなくなった。

その後、16年が過ぎた2014年10月、財団は日本地域での韓国文化財に関する流通実態を調査した中に、日本の古美術商 渡邊三方堂からの紹介に墓誌の存在を知ることとなった。

墓誌の存在を確認した財団は、1998年5月に金海空港の鑑定官室が搬出を防ごうとした経緯を知り、これを比較検討した結果、日本で発見された墓誌が不法に韓国から搬出されたものであることを特定することができた。

そして、財団は日本の古美術商 渡邊三方堂を訪ねて、墓誌について今までの経緯を説明した。渡邊三方堂は、財団からの説明を受け、墓誌について美術品としての価値以上に歴史的な文化財として非常に価値があることを強く認識するに至り、また、財団の活動趣旨に賛同された。そして、2015年12月、財団は、渡邊三方堂の好意により墓誌所蔵者 故等々力孝志氏に会うことができた。

当時、癌で闘病中の故等々力孝志氏は、室町時代から続く長野穂高の名士であり、韓国美術のみならず、日本美術の屈指のコレクターとして知られた存在であった。孝志氏は、韓国美術収集過程の中で、盗難の経緯については全く知らずに墓誌を日本の美術商から購入したものであり、墓誌が不法に韓国から搬出されたという事実については全く認識していなかったものである。また、財団も、同様にその事実を確認するに至った。

2016年11月にその所蔵者が死亡した後、財団はその遺族である等々力邦枝氏に弔意を申し上げた。その折、渡邊三方堂と共に財団は、墓誌の韓国への寄贈願いを等々力邦枝夫人に申し上げた。

等々力邦枝夫人は、『墓誌に刻まれている李先齊5男が、朝鮮通信使として日本に渡ることなく志半ば対馬で病死した経緯を、渡邊三方堂と財団から聞き及びました。5男の朝鮮通信使の方の魂が、墓誌と共に日本に渡り、その5男の方の魂とともに再び墓誌が韓国にこの度帰還されることが、李先齊 子孫達にとって大事なご先祖様方々へのまずもって何よりご供養になれば幸いです。韓国美術を愛し、日韓両国の友好を想う故等々力孝志の遺志を思い計り、また、李先齊 ご子孫方々の気持ちを敬い、墓誌の無償贈与を決めました。』と述べられ、墓誌を財団に寄贈することを決められた。そのような経緯で、2017年8月、墓誌は無事に故国の土を踏むことができたものである。

文化財として価値と評価

墓誌は、粉青沙器に象嵌技法で明文を刻んで白土をはめ込んだ後、釉薬を塗って焼いた位牌型である。保存状態は非常に良好だ。明文は板の前後、そして側面に合計248字を刻んである。墓誌の主人公の生涯や家系はもちろん、製作年代も明確に分かる。特に、墓誌を通じて初めて李先齊の生没年を公式的に確認できるので、資料的にもその価値が非常に大きい。

また、墓誌は、国の文化財(宝)として指定された墓誌が現在に4点があるが、それ

らと、指定文化財ではないが、その他の墓誌と比較しても、類似の事例がないほど非常に特徴的な様式を持っている。特に、位牌の屋根にあたる部分、一つの板が胴体の下の部分から二つに分かれること、高台に蓮瓣文など、『単純で奇抜な手法が圧倒的である』と評価されている。

『寄贈遺物の説明会』のお知らせ

- 日時：2017. 9. 19(火) 10:00 (9:40から撮影可能)
- 場所：国立中央博物館 教育館 講義室
- 内容：寄贈経過の説明、寄贈遺物の公開や価値などの説明、マスコミのインタビュー、質疑応答など
※寄贈者も日本から参席します

- 添付 1. 『粉青沙器象嵌 李先齊 墓誌』 文化財明細
2. 『粉青沙器象嵌 李先齊 墓誌』 日本現地での寄贈式の写真及び寄贈経過

(了)

[添付 1] 『粉青沙器象嵌 李先齊 墓誌』 文化財明細

분청사기상감 이선제 묘지
(粉青沙器象嵌 李先齊 墓誌)



表



裏

| | | | |
|-------|---------------|------|-------------------|
| 名 称 | 粉青沙器象嵌 李先齊 墓誌 | 製作時期 | 1454年(端宗2年) |
| 材質/手法 | 粉青沙器 / 象嵌 | 大きさ | 高 28.7cm 幅 25.4cm |

[添付 2] 『粉青沙器象嵌 李先齊 墓誌』 寄贈式写真及び寄贈経過

□ 寄贈式写真 (2017.8.22./ 東京)

| | |
|---|--|
|  |  |
| 遺物寄贈式 (2017.8.22. 東京) | 寄贈式記念撮影 (2017.8.22. 東京) |

□ 寄贈経過

- '14. 10 財団日本事務所、日本の古美術市場で墓誌の実見(東京)
- '14. 11 財団、墓誌の写真確認、出処把握に着手(ソウル)
- '14. 12 財団、墓誌の不法的に搬出した事実(1998.6)を確認(ソウル)
- '15. 11 財団、墓誌の代理人を面談(東京)
- '15. 12 財団、墓誌の所蔵者との交渉(1次、福岡)
- '16. 01 財団、専門家による墓誌の実見および所蔵者との交渉(2次、東京)
- '16. 09 光山李氏都門中、財団に委任状および同義書を受け取る(ソウル/光州)
- '17. 02 財団、墓誌の所蔵者との交渉(3次、東京)
- '17. 04 財団、墓誌の所蔵者との交渉(4次、東京)
- '17. 07 財団、墓誌の寄贈提案書を所蔵者に送付(ソウル→東京)
- '17. 08 財団、墓誌の寄贈式を開催 / 韓国に搬入(東京→ソウル)
- '17. 09 財団、墓誌を国立博物館に寄贈を完了